

札医大

サバイビン2B第Ⅱ相試験開始

膀胱がん治療早期実用化へ

札医大病院第一外科と医学部病理学第一講座は、東大医学研究所付属病院と共同で、医師主導型治療の「有効な治療法のない進行膀胱がん患者に対するサバイビン2Bペプチド単独投与およびインターフェロン併用療法」の第Ⅱ相臨床試験を開始した。

札医大は、昭和五十年代からヒトがん抗原の同定、ヒト免疫応答の分子機構解明、ヒト固形腫瘍のがん幹細胞抗原の同定等の研究を進めており、その過程でがん抗原タンパク質を小さく断片化した分子の一種であるサバイビン2Bを発見した。サバイビンは、がん細胞に強く発現する性質を

持ち、皮下注射すると思われた進行・再発膀胱がん者の体内でリンパ球を刺激して増加・活性化させ、がん細胞を選択的に攻撃して死滅すると考えられている。平成二十四年から実施した第Ⅰ相試験では、五三%の症例で腫瘍の増大を抑制する効果が確認できたという。

GVHD基礎、臨床を解説

北大血液内科学分野の豊嶋崇徳教授が編者の「みんなに役立つGVHD(移植片対宿主病)の基礎と臨床」Ⅱ写真Ⅱが基礎編と臨床編(診断、予防・治療、マネジメント)で構成され、急性・慢性の特徴に加え、皮膚科、眼科からみた臨床的特徴、内視鏡や放射線による診断を網羅。治療法全般はもちろん、成人と小児それぞれの患者長期フォローのあり方、服薬指導、口腔ケア、リハビリなど多岐にわたって解説している。

B5判四百二十三頁。医薬ジャーナル社刊。七千六百円(税別)。



臨床研究中核病院事業の進捗状況が報告されたシンポジウム

来年度に組織統合

北大病院 臨床研究を推進

臨床研究中核病院と適な治療法開発を進めるため、五年間にわたってハードとソフト両方の体制を整備すると紹介。この一年でセンター職員は総勢六十三人となり、同病院管理棟を改修し総面積三千二百平方メートルのセンターとするため、二十七年年度まで三期に分けて工事するスケジュールを示した。

数の増加、実用化までのスピードアップ、臨床研究の質向上を目指す、文部科学省の橋渡し研究支援拠点である北大探索医療教育研究センターとの機能統合を計画、先進的な医療技術を開発する新組織を、来年度に設置することも明かした。

北大細胞生理学分野(大場雄介教授)の藤岡容一朗学術振興会特別研究員らの研究グループは、インフルエンザウイルスが細胞内カルシウムイオン濃度を上昇させることで細胞内に侵入することを見出したと発表した。カルシウム上昇を抑制すると細胞内取り込みが低下する

ノロウイルス考

工学博士の視点から ①

北海道でも1カ月ほど前からノロウイルスの流行期に入ったようである。10月30日には札幌市内の市立幼稚園で140人の園児と職員6人の計146人が感染性胃腸炎とみられる症状を訴え、このうち2人からノロウイルスを検出したとする札幌市保健所の発表が報道された。

全員が軽症であったことは不幸中の幸いであったが、職員の何人かがダウンした状態で全園児の約半数が嘔吐や発熱などの症状を訴えるのであるから、現場の混乱は想像するに余りある。子供の家族にも感染者が出ていることが予想されるので、146人という患者数も、今回の集団感染においては氷山の一角に過ぎないであろう。

衛生環境が向上し、各種医療技術が発達した日本のような先進諸国においても、ノロウイルスはほぼ例外的に制御不可能な状況にある。制御不可能であるということの意味は、インフルエンザウイルスなどとは異なりノロウイルスワクチンが未だ開発途上であることから、ノロウイルスの感染から逃れるための策が手洗い・うがいの奨励ぐらいしかない、ということである。

北大工学研究院准教授

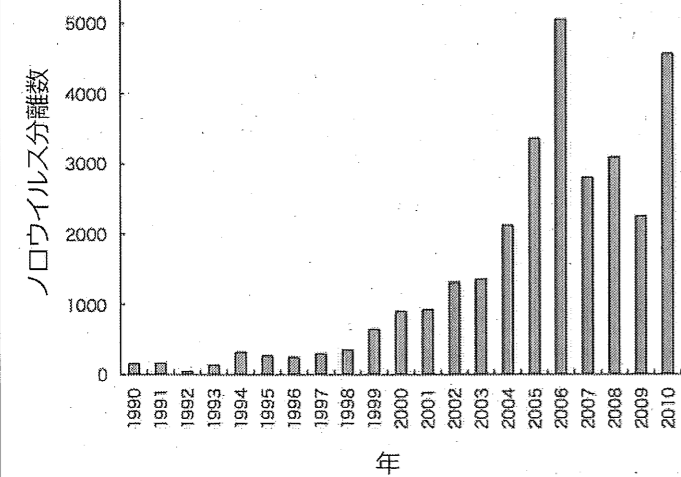
佐野大輔

グラフは国立感染症研究所が集計している病原微生物検出月報から抜粋したデータであるが、2000年代前半以降、急性胃腸炎患者からのノロウイルス分離数が急激に増加している。現在は1年当たり2000~5000件程度の分離数が報告されているが、これは1990年代の平均と比べると100倍近い値である。ノロウイルスの知名度が上がり検査体制が整ったことが分離数急増の1つの大きな理由ではあるが、それ以外にも最近20年の間に100倍というものは他の病原体には見られない変化である。

手洗い・うがいの奨励しか対応策が無いと書いたが、徹底的に行えば手洗い・うがいも有効であることは間違いないかもしれない。例えば、世界的に新型インフルエンザが猛威を奮った2009年から2010年初頭にかけて、至るところに手指消毒剤が設置されたことは皆さんも覚えておられるかと思うが、非常に興味深いことに、この時期のノロウイルス分離数は例年と比べて減少していた。医療・検査機関がインフルエンザへの対応で手一杯となり、ノロウイルスの分析に手が回らなかつたことも一因であろうが、普段よりも人ごみを忌避したり手洗い・うがいを意識的に行う人が増えれば、ノロウイルスの感染は抑えられることを示していると考えられる。

手指消毒剤と言えば、ノロウイルスはインフルエンザウイルスと違い、エタノール消毒剤は効かず、次亜塩素酸入りの消毒剤を用いるべきであると一般には考えられている。

ノロウイルスのようにエンベロープを持たない他の多くのウイルスがエタノールに非感受性であることから、ノロウイルスもエタノールに非感受性であると推測されている状況である。ノロウイルスの感染性を評価する術がない現在、エタノールでノロウイルスを滅菌できることは不可能であるが、ヒトに感染するノロウイルスに非常に近縁なマウスノロウイルスとサルノロウイルスを



ノロウイルスの日本国内における分離数 (国立感染症研究所・病原微生物検出月報より抜粋)

は、実はエタノール感受性であり、エタノールで処理することによって感染価が低下する。従って、ヒトに感染するノロウイルスがエタノールによって滅菌可能である可能性も存在するということになる。

いずれにしても、何か有効な消毒手法を将来的に見つけることができれば、特に幼稚園・保育園や老人福祉施設など、免疫力が比較的低い集団を預かる方々にとっては、施設の運営自体に危機をもたらしかねない大きな心配事の解決に繋がるであろう。

(5回連載します)

キャンパス

専門は医療情報学。医療資源分布の研究を行う中、過去データに基づき既存予測手法では近年の状況変化に対応できないことから、新たな概念によるインフルエンザ感染対策や治療法開発が期待できるという。

グループではこれまで細胞が外来因子暴露時にp38α/β/JNKシグナルの活性化を介してエンドサイトーシスを亢進し、物質を積極的に取り込む機構があることを報告した。

キャンパス

大学を卒業して以来、アトピー性皮膚炎の研究をライフワークとし、疫学や分子生物学など、多角的な視点から

耳垢と治療効果の関連

新システムで将来医療

北大保健科学研究所

ウイルスの細

侵入機序を解

インフル感染予